資料

松井将軍インタビュー記事

東中野　修道　編訳

上海南京攻略戦の最高司令官であった松井石根（いわね）大将が外国人からインタビューを受けたことは本多熊太郎『日支事変外交観』（昭和十三年一五二頁）などからもよく知られていた。その記事が何なのか、これまで皆目（かいもく）わからなかったが、このほど戦時中上海で発行された英字新聞や英文雑誌を収集していたとき、偶然、それが目にとまった。

南京陥落から二カ月後の *The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazatte* の一九三八年二月九日に出た「松井将軍の見解」（Gen. Matsui's Views）という短い記事によれば、松井将軍は幾つかインタビューを受けていたようで、その嚆矢（こうし）が上海の著名な英国人ヘンリー・G・W・ウッドヘッド（一八八三～一九五九）からのインタビューであった。その「松井将軍インタビュー特別記事――争点をあからさまに語る」（Special Article with General Matsui: Frank Views on Many Issues, *Oriental Affairs*, February 1938）が『東洋事情』（*Oriental Affairs*）の二月号に出たと書かれてあった。上海で権威ある英文年鑑『中華年鑑』（*The China Year Book*）の編集長を一九一二年（大正元年）以来務めていたウッドヘッドは、インタビューにはうってつけであったと言ってよい。ただ、『パリの夕べ』（*Paris-Soir*）も松井将軍にインタビューしていたそうだが、日本国内の大学図書館に見出すことはできな

かった。他日を期したい。

この二つの記事を今日の社会通念で読むとき、読者は驚かれるであろう。今日盛んに喧伝（けんでん）される「一九三七南京虐殺」はこのインタビューの四十五日前の一九三七年十二月十三日から始まったと言われるにもかかわらず、インタビュー中に一度も出てこない。「松井将軍の見解」は松井将軍を強く批判しているにもかかわらず、である。インタビュー中、南京陥落への言及があるにもかかわらず、「南京虐殺」が出てこない。問題となっているのは、国民党北伐軍が南京の宣教師を殺害し日本領事館領事夫人を陵辱した十年前の「南京一九二七」なのである。なぜなのか。間違った前提が間違った結論を導き出しているのである。「南京一九三七」という前提に立つから、「これはどう考えればよいのか」という誤った結論になる。

戦前、南京虐殺が政治プロパガンダとして国民党政府の「国際友人」によって政治宣伝されたことはあっても、責任ある国民党政府が、そして南京の欧米人の国際委員会が、また国際都市上海の外交官やジャーナリストが、南京虐殺を公言したことはなかった。国民党中央宣伝部は「敵の暴行を暴く」ことに全力を傾注し、十二月十三日の南京城門陥落から翌年十月の漢口陥落までの十カ月間、首都（正確には陪都）漢口で三〇〇回もの外人記者会見を開催しながら、一度も「南京虐殺」と発表したことはなかった。その場にいた外国人記者からも南京虐殺が質問として飛び出したことはなかった。

疑うことを仕事と訓練されている新聞記者、何かを耳にすると噂までも質問して記事にしかねない特派員の誰一人として、南京虐殺という認識を持ちあわせていなかったのである。それゆえウッドヘッド編集長も（事情通であったればこそ）当然南京虐殺には触れなかった。設問の際の前提が間違っているという所以（ゆえん）である。

戦前南京の重大事件と言えば、ウッドヘッド編集長の編集する『中華年鑑』一九三九年版（*The China Year Book 1939*）六四〇頁の「過去の主な出来事の索引」（Index to Previous Issues）が示すように、一九二七年の南京事件（Nanking Outrages）であった。ここに訳出した二つの記事が揃（そろ）って批判しているのは、英国の武器供給とシナ支援を問題視する松井将軍の発言である。

松井将軍インタビュー特別記事――争点をあからさまに語る

（Special Article with General Matsui: Frank Views on Many Issues, *Oriental Affairs*, February 1938）

『東洋事情』（*Oriental Affairs*）の編集発行人が揚子江流域の最高司令官である松井将軍に接見を許されたのは一月二十七日の午後、上海近郊の司令部（訳註、中支那方面軍司令部）においてであった。将軍の世間一般の印象は実に誤解されていると感じた。確かに将軍はある問題を熟考するとき目を閉じる癖があるが、決して典型的な仏陀のような人でもなければ老いぼれの老紳士でもない。その逆であって、将軍の挙措動作は活気に満ち、意地悪な質問が出ると目はいつも爛々と輝いて、会話は弾んだ。左手はタバコのパイプを手にしていなければ、いつも口髭をひねりまわしている。将軍はほっそりとした体格で、年齢の割には老けて見えない。どんな質問が出ても淀みなく滅多に見られないほどの率直さで答えるので、一定の問題について確固たる揺るぎない見識を持っていることは明らかだ。その幾つかは英国の読者にとっては不愉快であるか納得のいかないものかも知れない。しかしながらインタビューとは相手を反対尋問することではなく、与えられた時間内にできるだけ多くの問題について相手の見解を引き出すことだ。こうしてなされたのが下記のインタビューで、もし日本大使館書記官のK・オカムラ氏が流暢な通訳の労をとってくださらなかったなら、これほど早く報告書は作成されなかったであろう。ご親切にも氏は同行してくださったのである。

インタビュー

松井将軍は戦争の最中にあってあまりものを読む時間は持てなかったと語っておられたので、インタビューは戦争はいつまで続くとお考えかという質問から始まった。以下は将軍の発言の逐語的引用である。

「それは第三者の判断に任せるのがよい。蔣介石将軍は長期抗戦を口にしている。過去には数十年も続いた戦争があった。私としては、そう長くは続かないと思う」

「上海周辺の作戦で最も困難を極めたのは何でしたか」

「最初の二カ月間では大場（Tazang）鎮周辺の戦闘（訳註、上海防衛軍の集結地点、大場鎮陥落が上海陥落に至る激戦地）でした。作戦上最も困難だったのはシナ軍を打ち

破るということではなかったんです。そうではなくて、第三国の権益を侵害しないこと、侵害することで諸外国との衝突を新たに抱え込むことのないようにすることでした。かつてハーリッツ・アーベンツ氏（ニューヨークタイムズ記者）が、もし第三国の権益を考慮しなくてもよかったら大場鎮作戦はどれくらいで終ったかと質問してきたことがあった。時間も犠牲も半分で済んだでしょう、というのが私の答えでした」

「徐州（Hsuchow）攻撃が近づいていますが、大場鎮の時と同じ抵抗を受けると予想されてますか」

「大場鎮周辺の戦闘と徐州に向けての戦闘とでは比較にならない。シナ軍の猛烈な抵抗があるとは思えない。というのは、現在の国民党は〈口先で戦っている〉（fighting on their lips）からです。ですから、事実が決定的であると判明する日もそう遠くはないでしょう」

「日本軍最高司令部と上海共同租界工部局との現在の関係ですが、満足されていますか」

「上海共同租界工部局（訳註、共同租界の行政機関）は最善を尽くしていると私は強く確信しています。しかしその問題は英国極東政策の根本を必ず揺るがすことになります。英国の極東政策が現在のままであるかぎり更に面倒なことや、上海地域での不満足な状況が起きると予想せねばなりません」

「日英関係はどうお考えですか」

「過去に起きていたことに比べれば状況は改善されつつあると言えましょうが、抽象的な形で簡単に言えば、英国の極東政策の本質には疑いがありません。その国民党政府支援は戦争の勃発いらいシナ通貨の固定相場制によって際立っている。細かいことになりますが、英国から国民党政府に供給されてきた大量の武器弾薬もその一例です」

「英国は弾薬の供給という問題で厳密な中立政策の一線を超えたというふうにお考えですか」

「宣戦布告がなされていないと言われるかも知れないが、簡単に言えば英国は厳密な中立の政策に踏みとどまっているのでしょうか」

「では、英国はシナへの武器弾薬の供給という点で独伊よりも中立的ではないとお考えですか」

「その点は、私はそんなに精通していないのですが、シナ人が英国の供給にかんして言っていることから判断すれば、疑いなく、国民党政府は英国を最も信頼できる支援者

であると思っています」

「税関にかんしては現在どうお考えですか」

「もともと私は上海の税関を直ぐに接収するつもりでした。しかしこの問題はもっと穏やかな方針で取り扱い、税関当局とはこの問題をもっと融和的な基準に立って議論してもらうのがよいと思った。交渉は現在も続行中だが、時間がかかり過ぎているようで、もしそうなら元の見解に立ち戻らなくてはならないかも知れません。被災地とその地の住民を復興させるうえで無為に日一日と過ぎ去っていると感じられてならず、そういうことなら、ある種のシナ人の政府が財源を十分にもって立ち上げられねばならない。そうなれば、その財源は税関に仰がねばなりません。だから私の結論は、税関は住民やこの周辺地域の復興と直結しているということになる。しかしながら私が上海の税関を接収すると言っても、それは税関の行政機関を日本側が握るということではなく、シナ人の新政権は――それが治安維持会とか自治政府とか呼ばれようとも――その財源を税関から引き出さねばならないということです」

「その場合ですが、税関は外債貸付業務（Foreign Loan Services）を維持し続けるべきだとお考えですか」

「税関との交渉は外債貸付業務を含めてなされるべきだと思いますが、ここで理解しておくべきことは、かかる外債貸付業務に見込める総額が以前よりもかなり低いということです。かなり率直に言って、そして人道的観点からしても、随分と減少した税関収入から外債貸付業務に向けられている総額の引き出しを外国の債権所有者が控えて、その一部をシナ人貧困層の救援と手当に使えるようにすることは外国人債権保有者にとってよくないことなのでしょうか。ローズヴェルト大統領ですらシナ人救済のために一〇〇万ドルをと訴えているくらいですから、もし債権（訳註、税関収入を担保とする外国債券）を保有する外国人が私の言うように考えてくれるなら一〇〇万ドルくらいの額は直ぐにでも調達できるでしょう」

「日本における英国攻撃と英国批判を、極東の英国人はかなり関心をもって見ています。この問題を説明していただけますか。また中立からの逸脱――これは英国輿論には我慢できないでしょうから――これは横に置いて、日英関係を改善する方法について何か示してもらえますか」

「今日はその問題をあなたと話したいと思っていたんです。英国と日本の輿論を改善するという問題ですが、これ

はこの上海にいる英国人が最もよく扱うことができます。極東の状況を部外者よりも遙かによく理解しているに違いないからです。私の記憶によれば、私はフレイザー氏（タイムズ）と南京陥落の前（訳註、十一月三十日）に会いました。そして彼からあなたに話があったかも知れませんが、私は彼にそのとき本国の国会議員は上海と香港を取り違えたようだし、この種の理解力の欠如が大英帝国の極東政策に反映したかも知れないと話しました。この間の事情はあなたもよくご存じでしょうから細部にわたって話すことはいたしません。英国がシナにおける投資金をいかに懸念し、かかる投資金をも含めて英国の権益を守ろうとするその政策には異議は唱えません。これに反して私があなたにぜひとも訴えたいことは、我々が現在の状況においてどう感じているか、十分にご理解いただきたいということです。これまでの英国の投資額は概略二十億ドルに達していたと見て間違いないでしょう。目下の戦争における日本の損失額はその額よりも大きくないと言えるのでしょうか。青島だけでも日本人の損失額は五億ドルに達したと新聞は言っている。そして現在の軍事行動との関係で毎日必要となる巨額の出費についても考えなければなりません。もし英国がシナにおける権益をひたすら守るという政策を超えて、国民党政府とのこれまでの政治的経済的関係を維持するために断固たる立場を取るならば、実に重大な性質を帯びた衝突が我が国と我が国のかつての同盟国との間に生じるかも知れない。英国は、通貨改革の時に、日本は協力しなかったと言うかも知れない。しかし日本とシナのあらゆる過去の衝突の結果が今日の状況になっていると考えるとき、日本が数年前に英国との協力を拒否したことも十分説明できるでしょう。あなたは私よりもシナを知っている。英国もまた過去に置いてシナで苦（にが）い経験を味わった。国民党政府の焚（た）きつけた排外運動の矢面に最初に立ったのが英国でした。それでとうとう漢口と九江（訳註、漢口の下流、南京の上流にある揚子江沿岸の都市）の英国租界を放棄することになった。日本がちょっとでも後退し、国民党政府との親しい関係が英国の態度だとしたら、次には英国が再びシナ人の排外運動の対象にならないと誰が言えるのでしょうか」

ここで聞き手は、英国警察が反日デモを鎮圧しようとしたことに起因する事件に関与したという事実のために英国

が最初に排外運動の巻き添えになったということ、そして英国は日本に協力する機会がなかったとは言わせないほど、一九二七年初めの上海防衛において、それから南京事件（Nanking Outrages）につづく日英共同行動において、日本の協力を求めたということを指摘した。このような場合、英国は独力でシナとの戦争に乗り出すとかシナにたいして思い切った行動をとれるといった状態にはなかったことをぜひとも考えに入れておかねばならない。

将軍は語る。

「あなたのご説明は他の人からも聞きました。しかしあなたは日本のシナにおける立場が英国とは根本的に違うということを理解すべきです。日本はシナを生命線と考えている。もし日本がシナの排外的なボイコット運動に晒されるということであれば、日本は英国と同盟するわけにはいかない。過去において日本が行ったことが時に英国を傷つけたかも知れないが、だからと言って英国が日本の背後で密かに動き出してもよいということにはならない。我が国の成長と発展を考慮するとき、日本がシナで拡大するのは避けられない。英国側にこの状況の認識がないことから、残念ながら両国間の不必要な衝突に至っていると思う」

「この場合、どうして英国を特に問題とされるのか。極東にたいするアメリカの政策も全く同一線上にあるのではないですか」

「英国とアメリカのシナ政策は同じかも知れないが、私たちの心には違って映るのです。もしこのまま事態が進行することにでもなれば、シナにおける英国と日本の利害は残念ながら衝突するに至ると思う。日本人の精神は少し過敏で感じやすいと評されるかも知れないが、シナにおける日英関係と日米関係は本質的に異なって見えます。もし英国人に極東の真の状況が摑めないならば、休戦になっても重大な衝突が今後起こりかねないと思う。提督たるチャールズ・リトル卿に会ったとき、シナにおける実に込み入った重要な日英間の関係に注意を促し、現在こちらで戦争に従軍している日本軍の軍人にかんするかぎり不必要な摩擦を軍同士の間に招かないよう、あらゆる点でできるだけ絶対に用心する決心である、と請け合っておきました」

「上海の北部地域や東部地域が正常な状態に戻るのはいつでしょう、簡単に述べてもらえますか」

「元来私は昨年末頃には虹口（Hongkew）地域が正常に戻ると思っていました。しかし一つにはこの地域の大部分

は海軍陸戦隊がパトロールしており、また一つにはあそこには保護を必要とする膨大な数の日本人がいる。海軍の意見は、無差別にシナ人を帰還させることは時期尚早にして得策ではないということでした。その意見に異議は言えなかった。それでも私はこの地域を可能な限り早急に正常に戻すことに賛成であり、数日前この問題にかんし海軍当局に注意を促し、可能なら、普通のシナ人が旧正月には戻れるようにと力説しておきました」

「韓復榘（かんふくく）の処刑はどう思われますか」

「実に気の毒なことだと思います。推測を許してもらうと、李宗仁に、不運にも韓将軍が処刑されるという予感があったなら、彼を逮捕して漢口に送ることはなかったろうと思う。蔣介石はこうすることで部下の士気を高めて維持できると思うかも知れないが、むしろそれは残念ながら彼の配下の軍隊には裏目に出ると思う。最後まで戦う決心の一将軍でさえ、もし現在のシナ軍に私が目撃するほど配下の下士官兵の士気が低下していくならば、そうはできない。唯一例外があるとすれば教導総隊（Model Training Division）です。蔣介石が韓復榘にとった行動はむしろ残酷であった。人間的に不可能なことを要求していたからです。だから将校たちの士気をも挫（くじ）くことになるでしょう」

車中の外国人がもし日本軍兵士から□□□（Outside Roads）でクルマに同乗させてくれるよう頼まれたら、そうすべき義務があるのかと質問すると、将軍の答えはこうであった。

「日本軍の兵士は皆、この軍事行動中、かかる大きな犠牲を払い、実に多くの苦難をじっと我慢してきたのですから、この地の外国人にたいして、できるかぎり彼らに共感して便宜を図ってくださるようにお願いしてもよいでしょう。とは言え、上海周辺の外国人を苦しめてはならないという厳しい命令も出しております」

聞き手の私に別れの挨拶をするに際して、これまで述べてきたことはどれもこれもただただ緊密で友好的な英国との協力を心から願ってのことです――、と語る松井将軍は莞爾（かんじ）としていた。

松井将軍の見解

（Gen. Matsui's Views, *The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazatte*, Feb. 9, 1938.）

松井将軍はこの地域で軍事行動を展開中の日本軍の司令官として、幾つかのインタビューを報道関係者に与えているが、H・G・W・ウッドヘッド氏（C.B.E.）に与えられたインタビューがこの地で公表された最初のものとなる。それが『東洋事情』（*Oriental Affairs*）の今月号に出ている。松井将軍は聞き手から投げかけられた質問にたいして大変率直に返答しているので、将軍の所説は日本人の意見を、或いは少なくとも将軍に代表されると考えられる日本人の意見を、西洋人が理解するうえで実に役立つものであろう。この観点からしてこのインタビューは格別の重要性を有しており、日本軍が現在の状況をその全ての局面においてどのように見ているのか、あらゆる面において知りたいと興味をもつすべての人が読むべきものである。それでも松井将軍の所説には将軍のこれまでのインタビューと幾つか一致しがたいものがある。たとえば日英関係の問題にかんして将軍はこう語る。

過去に起きていたことに比べれば状況は徐々に改善されつつあると言えましょうが、抽象的な形で簡単に言えば、英国の極東政策の本質には疑いがありません。その国民党政府支援策は戦争の勃発いらいシナ通貨の固定為替レートによって強められている。細かいことになりますが、英国から国民党政権に供給されてきた大量の武器弾薬もその一例です。

松井将軍は、このインタビューの時のように、必ずしもシナへの武器弾薬の供給に重きを置いていたわけではなかった。と言うのは、将軍は『パリの夕べ』（*Paris-Soir*）の特派員にたいしてはこう語っていたと伝えられている。

終わりに臨んで松井将軍はシナに対する外国の援助、とりわけ英国の援助は非常な重要性を有するものではなく、無視できないほどにシナを助けたのはドイツ人顧問だったと語った。

インタビューを通じて明らかなのは、松井将軍が英国を邪悪な、不自然で強引な解決に持ち込もうとする国（*deus ex machina*）と見なしていて、他の国々も全く同じことをしてきたか現にしているという事実は、松井将軍には明らかに些（いささ）かも憎むべき違反ではないようだということである。